

## らっば亭奇譚集 号外2012秋版

京都SFフェスティバル2012

合宿企画「ラファティ部屋」協賛スペシャルエディション

オーディファックス・オハンロン少佐（退役はしておらんぞ）語るところの  
おお、ご機嫌な二枚ばね舌よ！

「あの一九四〇年代の大戦で、何が一番心に残っていますか？」

今日のこと、四十五歳の涙垂れ小僧がわしに訊きおった。「英雄的な行為、激烈な戦闘の  
一大絵巻、あるいは血塗れの屍の山。強烈な印象を受けたのはこのあたりです？」

「いや、そんなもん、ほとんど憶えておらんなあ」わしは答えた。「もしそんなことが本  
当にあったとして、まあ疑わしいもんだが、ほとんど記憶に残らなかったってことだな。憶  
えとるのは激務と、合間の飽き飽きする暇な時間だ。それと、ご機嫌な二枚ばね舌の連中だ  
な。おかげでどうにか耐えることができたんだ。ああ、あのばね舌の奴らったら！」

「何のことか、さっぱりわかりません」やつは言いおった。「おっしゃってるのは、本物の  
舌のことですか？ われわれの口のなかにあって、喋るのに使う？」

「ああ、それだな。奴らも普段は口の中にしまっておった。砥石で鋭く研ぎすます時にだけ、  
ひっぱり出していたなあ。ああ、奴らの二枚ばね舌。奴らの二枚ばね舌話！」

「その二枚ばね舌話ってやつ、ひとつ話していただけますか」

「よし。ロニー・スウィートウォーター伍長の話をしよう」わしは話し始めた。

「この戦争がすっかり片付いて家に帰った時には、プラスバンドがぼくを出迎えてくれるん  
です」ある日、ロニーはわしに言った。「帰郷してプラスバンドに出迎えてもらえるやつな  
んて、三人にひとりもないでしょうね」

「昔っから、マウスピースから吹き込んだ息が指孔までとどくまでには、いくらもしくじり  
はあるって言うぞ、ロニー」わしは言った。「おそらくお前が帰り着いた時に迎えのブラ  
スバンドはおらんだろうな。いや、お前が帰ってくることにすら気付かんだろう。鉄道の駅で  
催される帰郷祝いのセレモニーも、誰かがなかったことにするんじゃないかな」

「うちの町には鉄道の駅なんてないですよ。だいたい、いまだ鉄道が通ってないんですから。  
っていうか、道路すらないんです。それに郵便局も電話もない。平地からうちの町に連絡す  
るときは、ロキシーって名前の雌カラスを使うんですよ。彼女なら、たとえ嵐でもものとも  
しません。ぼくが帰る時には彼女に頼んでみんなに伝えてもらいます。ぼくの町まで一息に  
絶壁を飛び上がって、にぎやかな装飾音たっぷりにぼくの帰還を告げてくれるでしょう。そ  
して十一人のバンドが盛大な演奏でぼくを出迎えてくれるんです」

「十一人だって？ ロニー、へんてこな数だなあ。楽器の編成はどうなってるんだ」

「楽器の名前は知らないなあ。管楽器と太鼓ですよ。何年か前にグリーン・ビーチ・ヴァレ  
ーでお祭りがあって、プラスバンドも来てたんですよ。ところがいきなり鉄砲水が人々も何  
もかも押し流してしまっただけです。『救いませーっ』うちの爺さんが叫びました。そこでぼ  
くら十一人（爺さんを除いて、うちの町には十一人しかいないんです）は山から駆け降りて  
各々が激流から救いあげたんですよ。それから山のてっぺんまで運び上げ、すっかりご満悦  
でした。『ああー、わしは人々を救いませって言うたんじゃ。このくそつたれの太鼓やラッ  
パじゃなくってな』爺さんは不満げに言いました。『まあ、いまさら言うてもせんないこと  
じゃ。これはこれで良しとしようか』

こうして、ブラスバンドから十一人分の楽器を手に入れたぼくたちは、練習を始めました。でも、ここには爺さんを入れて十二人いるのに、楽器は十一しかありません。みんな、爺さんが死んでくれたらちようど全員に楽器が行き渡るのになあって言ったんですよ。でも爺さんは嫌がりました。それで、ぼくが山を下りて、軍隊に入ったんです。これでみんなにくまなく楽器が行き渡りました。ぼくが除隊するときは、軍隊ラッパを持っていこうと思います。そうしたら、十二人編成のバンドになりますからね」

「ロニー・スウィートウォーターはわが中隊のラッパ兵だったんだ」わしは言った。「いいラッパ吹きだったぞ。ジャズもラグタイムもスイングもお手のもの。ロニーの話はまだまだあるが、お前にとっちゃ、ちとでかすぎる話かもなあ」

「おっしゃりたいことが、ちよつとだけつかめてきたような気がします」四十五歳の渾垂れ小僧は言った。「でも、ほんのとつかかりだけ。もうひとつ、別なのをお願いできますか」

「アドルフだな。アドルフ・マーチン上等兵だ」わしは言った。「アドルフは一通の手紙を手にしておった。それにまつわる話をしながら、わしに見せたがっているのがわかったな。アドルフは素敵なでっかい話をいくつも話してくれるやつだ。その話のひとつは肩のところまででいたい十三フィートもあるでっかいやつだった」

「誰も信じようとしませんが、ルイジアナのソルトウォーター叢林には北アメリカゾウがまだ生息しているんですよ」その日、アドルフはわしに言った。「この生物はマンモスとマストドンの中に位置づけられるんです。北アメリカゾウってのは、うってつけの名前ですね。ソルトウォーター叢林に不慣れな連中は、まだ絶滅していないってことを信じようとしません。現存する世界最大の陸生動物なんですよ。家にも一頭いて、名前はエマおばさんっていうんです。すべての生き物のなかで、彼女は最も気質が優しい獣で、かつ最も知

性的なんです。ぼくの妻は、ここだけの話ですが、ホンキートンク酒場に入り浸って子供を放ったらかしなんです。でも、でっかい年寄りのエマおばさんが完璧に子供たちの世話をしてくれているんですよ。ぼくの妻は、ここだけの話ですが、字が書けないんです。でも、代わりにエマおばさんが書いてくれるんですよ。鼻の先っぽでペンを持てね。絶妙な書き手ですよ。いや、たぶん『書き鼻』って言うべきかなあ。ここに彼女が書いた手紙が一通あります。みてください。少佐にも確認していただきたいんです。ゾウが書いたにしては、良く書けていると思いませんか」

「ふむ。フランス語だな。北アメリカゾウがフランス語を書けるとは知らなかったなあ。だが、エマおばさんは綴りがあんまり得意じゃないようだな」

「いわゆる『ママ綴り』ってやつですよ」アドルフは言った。「ぼくの妻が発音した通りに綴るんです。ぼくの妻は、ここだけの話ですが、あんまり発音がうまくありません。でも、エマおばさんはぼくが妻の声を聞きたがっているとわかっています。このママ綴りからは妻の声が聞こえてくるんですよ。筆跡鑑定は専門家っているでしょう。この手紙をみてもらってください。卓越した筆跡鑑定師なら、即座に雌の北アメリカゾウが書いたってわかるはずです。このTの文字の見事な書きっぷりをみてください。これをゾウが書いたなんて信じられます？」

わしは実際にみせてみたよ。砲兵C中隊に筆跡鑑定本を執筆したやつがおったんだ。自分のことを卓越した専門家と言っておった。やつの鑑定結果はこうだった。

「この手紙は二〇歳代半ばの女性によつて書かれています。陽気で、悩みのない性質です。幸福で、積極的で、おそらく冗談やおふざけが好きな気性ですね。このTの文字の書きっぷりをご覧なさい。完璧です。彼女に間違ったところは微塵もない」

「でも、鑑定士にはゾウが書いたってわからなかったんでしょう」わしが報告書の内容を言

い終わると、四十五歳の洩垂れ小僧は言いおった。

「おそらく、それはあまりたいした問題じゃないと思っただろうな」

「ちよつとばかり、わかってきたような気がします」 洩垂れ小僧は言った。「もうひとつ、二枚ばねっ話ってやつを話していただけませんか」

「それじゃあ、ロバート・グレイゴスリン軍曹の話をしよう」

「ちよつとよろしいですか」ある日、グレイゴスリンがわしに話しかけた。「この戦争が終わっても、ぼくを特別射撃教官として軍に残すようにって聞いたんです。たしかに、うちの中隊でぼくは一番の狙撃手です。そして射撃においてはうちの中隊が世界一ですね。ぼくはみんなのライフル射撃の腕をぼくと同様まで引き上げることができます。でも、そのためにはみんなを故郷の東テネシーまで連れて行かないやならない」

「説明してくれ、ロバート」わしは言った。

「うちの田舎には三マイルの幅の谷があります」グレイゴスリンは言った。「谷を越えて会話するにはちよつと遠すぎます。それで、ぼくらはライフルで会話するんです。まず、メッセージを弾頭に刻みます。うちの田舎ではみんな眼が良いんで、ごくごく小さな字でも読めるんですよ。そして弾丸をライフルに込めて、谷を越えて撃ち込みます。話をしたい相手の右つぺたを狙うんですよ。そしたら……」

「右つぺただと？ グレイゴスリン、右つぺたって何だ？」

「こんな基本的なことばがわからないってんなら、なかなかうまくお話するのは難しいですねえ。右つぺたって言ったら、右の尻つぺたですよ。もし利きつ尻が左だったら、左つぺたを狙います。そしたらポケットナイフで尻つぺたから弾丸を挟みだして、刻まれたメッセージを読むんですよ。それから自分の弾丸に返事を刻んで、相手の右つぺたに撃ち返します。」

そしたら……」

「三マイルだと、ロバート？ ライフル射撃でか！」

「ライフル射撃で、ですよ。みんな名手なんです。ぼくの故郷では、みんな撃てますよ。他のところに撃ったら、相手は弾丸を探し回らなきゃならない。でも右つぺたに撃つとわかってたら、そこを挟めばいいんですからね。長い間、ぼくらはそうやって会話をしてきたんです。谷のこつち側もあつち側も、とびきりの連中なんです。たったひとつだけ、ささいな問題があるだけで」

「ふむ、それは何だね、ロバート？」

「みんな、歩くときにちよつと痛いんです。さて、ある夏のこと、ぼくはライフルを使ったこのやりかたで女性とつきあっていました。彼女はおしゃべり、天性のおしゃべりでした。言ってみれば、夏が終わるまで彼女の渾身のおしゃべりをこの身に受け続けたわけです。彼女、あんまり考え深い質じゃなかったんで、半分くらいは何も刻んでない弾丸をくらわされましたけど、まあそれはそれでよしってね」

ロバート・グレイゴスリンも天性のおしゃべりだったなあ。

四十五歳の洩垂れ小僧は熟れてないリングを喰いすぎたような顔つきになりおったな。

「はい、なんとなくキキメがわかってきたようです。でも、ちよつと効き過ぎかなあ。もうひとつ、別なのをお願いします」

「ベネディクト・ブードロー上等兵がいたな」わしは言った。「ブードローの女房は特産のレポンスを食べるといつも極彩色の蕁麻疹が出る体質だった。レポンスは見てくれの悪い玉葱のイトコみたいなやつだが、より活力に満ちた根菜なんじゃ」

「彼女に出る蕁麻疹は特別でした」ブードローは言った。「近くでよく見ると、新聞の記事

や写真にみえるんです。いや、実際に『キャンプタウン日報』って新聞の記事そのものなんです。コミック欄もありました。それも、誰もかつてみたことがないようなコミックで、とびきり上出来なやつです。彼女が特産のレボンスを食べたら、何マイルもの向こうからみんなが新聞記事やコミックを読みにきたものです。でも、彼女はとても慎重で質だったので、絶対に誰にもみせようとしないうちに四方の領域がありました。その誰も読ませてもらえない領域に書いてあるのは、まこと興味深く重大なニュースでした」

「その日の新聞を実際に取り寄せて、その記事を読んでみようとするやつはいなかったのか？ あー、その『キャンプタウン日報』と言ったかな」

「それが問題なんですよ、少佐」ブードローは言った。「ルイジアナの地図にキャンプタウンなんて町は載ってないんです。それに、彼女の蕁麻疹に出てくる新聞の日付はいつも何年か先の未来のものなんですよ」

「それは読んでみたくなるなあ」

「戦争が終わったら、ぼくらに会いにきてくださいよ。ロアノークです。ルイジアナ州ジェファークソン・デイヴィス小教区にある。一時ですが、妻の蕁麻疹が治ったかのように思えた時がありました。新しい医師が、完治との診断を下したんです。でも、すっかり再発してしまいました。結局、蕁麻疹を治すには、レボンスを食べるのをやめるしかないってことなんです。彼女はやめるって誓うんですが、我慢しきれず食べてしまうと、たちまち再発します。

いや、どんどん悪化してますね。今はぼくが海外に居るんで、すっかりたがが外れているんじゃないかなあ。まあ、いつか来てみてくださいだよ。その時にうまく再発のタイミングがあれば、少佐お望みの未来のニュースや、世界最高のコミックが読めますよ。それに、あの小

説も」

「どんな小説なんだね？」わしは尋ねた。

『戦争と平和』ですよ。世界最長の小説です。いや、聞くところでは日本にはもっと長いのあるって話ですけどね。彼女を剽窃罪で起訴しろって騒ぐ連中もいるんですが、弁護士に相談した限りでは心配なさそうです。何十年前に著作権は失効してるんで、訴えられることはないだろうと。それはさておき、彼女の蕁麻疹ヴァージョンではちよつとばかしオリジナルとの差違があるんですよ。彼女は会社を興して、たくさん稼いでいますよ。ぼくは離縁されるんじゃないかなあ。ぼくが軍の上等兵として稼いだ給料なんて、いまや彼女にちょっとはした金ですよ。未来のニュースに、世界最高におかしくって煽情的なコミック、そしてラストがどうなるか誰もわからない小説『戦争と平和』。彼女はだもうけしています」

「トルストイの書いた『戦争と平和』とはラストが違うのか？」

「そうみたいです、少佐。彼女の蕁麻疹ヴァージョンでは、ナポレオンが勝利しそうな勢いですね」

四十五歳の洩垂れ小僧は ロードアップル 馬糞をわんさかと喰らったような顔つきになりおったな。

「いったい、あなたの部隊には何人の兵士がいたんですか？」やつは訊いた。

「二百四十六人だな」わしは答えた。「その全員が二枚ばね話の達人だった。わし以外のみんながな。わしはひとつも話せなんだ。だが、やつらの話ならまだ何百とあるぞ」

「ああ、ありがとうございます。もう十分な材料が揃いましたよ」四十五歳の洩垂れ小僧は言った。やつはノートを鞆にしまい、出て行きおった。

最近の若いもんが、まだこんな話に興味を持ってくれるなんて、いいことだなあ。

"Oh Happy Double-jointed tongues! by Major Audifax O'Hanlon (unretired)", Boomer Flats Gazette 2, 1993